

機関番号：15401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 ~ 2010

課題番号：19520233

研究課題名 (和文) ドイツ文学における史実と想像力に関する研究

研究課題名 (英文) A study of history and imagination of German Literature

研究代表者

島谷 謙 (SHIMATANI KEN)

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授

研究者番号：00243519

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、近現代の複数の作家の史実（歴史）を踏まえた作品、歴史文学を対象とする。

史実を見極めながら、時代（史実）に対峙し発動される想像力と方法論の在りようを捉え、文学という器の可能性を探る。

対象作家はドイツ古典主義を代表するF. シラーから20世紀のS. ツヴァイクに及ぶ。

主な研究成果として、『歴史と想像力』を世界思想社から刊行した。

『大学新入生に薦める101冊の本』（岩波）では、司馬遼太郎や藤沢周平、マサリクなどの著書を解説し、ドイツと日本の歴史文学の相違に関して考察した。

「ドイツ表現主義とビューヒナー」という論文では、19世紀前半期に活動したビューヒナーの作品が、20世紀前半に活動した表現主義の劇作家トラーとカイザーの作品へ与えた影響関係を考察した。

研究成果の概要 (英文)：

I make a study of **history and imagination of German historical literature (novel and drama)**. I make sure at first whether a historical fact is true or not.

After I understand next state of **imagination and methodology toward the history**, I consider a possibility of literature.

The subject of the study is Friedrich Schiller, C.F.Meyer, Stefan Zweig, Georg Kaiser and so on.

I published "History and Imagination" (「Rekisi to Souzouryoku」) through the Sekai-Shisousya publishing company as the production of the study.

I explain the books of Ryotarou Shiba and Syuhei Fujisawa, Masaryk in the book "101 books for a freshman (Daigaku-sinnyusei ni susumeru 101 satu no hon) through the Iwanami publishing company.

I consider then german and japanese **historical literature (novel)**.

I consider the influence of Georg Buechner on the works of Ernst Toller and Georg Kaiser.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：ドイツ文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語文学

キーワード：歴史文学、想像力、シラー、C.F. マイヤー、S. ツヴァイク、G. カイザー

1. 研究開始当初の背景

今迄に『ナチスと最初に闘った劇作家—エルンスト・トラーの生涯と作品』（ミネルヴァ書房、単著、348頁）と『ナチスと闘った劇作家たち』九州大学出版会（単著、364頁）の二冊の研究書を上梓しました。

研究書をまとめる過程で、同一対象（人物、事件）を扱う際に、作家により現実の把握の仕方、対象の選択、作品構成、因果性や各要素の関連付けなどが大きく異なり、作家の世界観や想像力、方法論の相違が客観的で同一なはずの事実（史実）の表現に大きな差異をもたらすことが大きな問題点として浮かび上がりました。

ドイツ語圏における歴史文学に関して、史実と想像力の関係を考察した研究が少ない。屈曲に富んだ長い歴史のあるドイツ語圏で書かれた作品を考察するうえで、史実と想像力の関係を考察することが不可欠です。

2. 研究の目的

本研究は、近現代の複数の作家の史実（歴史）を踏まえた作品、歴史文学を対象とする。

史実を見極めながら、時代（史実）に対峙し発動される想像力と方法論の在りようを捉え、文学という器の可能性を探る。

文学では史実を踏まえながら、記録にない人間の内面に踏み込み、想像力を駆使して真実に迫ります。史実を忠実に再現したシラーの歴史劇においても決定的な場面（史実のない女王同士の対面等）で想像力（フィクション）が機能します。他の作家も史実を踏まえた上で虚構の人物を登場させ、主人公の生涯を浮彫りにします。

作家は対象となる時代特有の性格を把握し、その時代に生きた人物の生き様や夢を捉え、その行動や事件に作者の人間観や時代認識を投影します。

3. 研究の方法

対象作家はドイツ古典主義を代表するF.シ

ラーから20世紀のS.ツヴァイクに及びます。

近代から現代までを射程に置き、社会史や文化史と文学との接点と相違点を探ります。

一世紀半にわたる歴史的变化を見据えて作品を考察することは、一時代に限定した作品の考察とは異なる認識をもたらします。近代から現代までを射程に置いています。

西欧と日本では歴史的な発展過程が異なるために、歴史認識や歴史観が大きく異なります。

西欧近代の代表的な歴史観の一つであるヘーゲルの『歴史哲学』では、個人が自由と人権を確立し理性的な国家を作る発展過程として歴史を捉えています。ヘーゲルの歴史哲学ではアジアの歴史は西欧とは異質で、しばしば非合理的なもの、アジア的停滞として扱われています。

こうした歴史観の相違は、異なる歴史文学を生み、歴史文学観に大きな相違をもたらします。歴史文学研究においては、西欧と日本の歴史文学を一元的に評価する共通の評価軸が確立していません。

従来の研究成果を最大限に踏まえ、日本の歴史文学および歴史文学研究とも対照させながらドイツの歴史文学作品の特質を把握し、解明してゆきます。

4. 研究成果

研究成果として、『歴史と想像力』という研究書を世界思想社から刊行しました。

シラーはドイツ古典主義を代表する劇作家で2005年に没後二百年を迎えましたが、日本ではシラーの歴史劇に関する研究は限られます。『マリア（メアリー）・スチュアート』は「ドイツの悲劇中もっとも感動的で、もっともよく構想された」（スタール夫人『ドイツ論』）作品です。

本研究では女王同士の対立を分析する際、ヘーゲルの『精神現象学』を援用し、考察しました。そして20世紀のブレヒト等による改作劇と対比しました。

ナポレオン軍とドイツが対峙する渦中に書かれ、英仏百年戦争時代のジャンヌ・ダルク

クを主人公とするシラーの戯曲『オルレアンの少女』では、国家と共同体をめぐる問題点を中心に考察しました。シラーの国家・共同体観をヘーゲルの国家観と対照させ、相違点を捉えました。

C.F.マイヤーはケラーと並んで十九世紀後半のスイスを代表する作家で、「ケラーとともに一八四八年以後の時期の最も優れた、リアリスティックな作家の一人」（ルカーチ『歴史小説論』）と評されますが、日本人による研究書はありません。彼はドイツがビスマルク主導のもとに国家統一を果たした時期に作家活動を開始しました。

代表作『ユルク・イエナッチュ』は「ドイツ文学史上最も有名な歴史小説」（山口裕）であり、三十年戦争時代のスイスを主な舞台とし、ヨーロッパの覇権をめぐるハプスブルク家とフランスとの二大国家対立の狭間で独立を求めて苦闘する主人公の悲劇が描かれています。

作品ではハプスブルク家が軍事的な生命線と見なした北イタリアからスイスを経てドイツやオーストリアに至るルートをめぐる攻防が展開され、スイス南東部のグラウビュンデン州の風土が詳しく描かれています。

この作品の舞台となる地域の地理的特性を検証し、作家が新たに加えたモチーフと史実との関連性を捉え、作品世界を解明します。

C.F.マイヤーは八歳年上の同国人J.ブルクハルトの『イタリア・ルネサンスの文化』に深く共鳴し創作しました。両者のルネサンス観および同時代に対する距離感は、きわめて同質な精神性を感じさせます。

C.F.マイヤーの歴史小説において、人間の苦悩、喜び、幸福といった生の在りようはルネサンスも一九世紀も基本的には変わらないとする考えが窺われます。

そうした彼の人間観を小国家に分裂したルネサンスイタリアを舞台とする小説『アンジェラ・ボルジア』に探り、史実と虚構部分を区別し、夢や回想など作者が加えた要素の持つ意味を捉えました。

シュテファン・ツヴァイクは近世ドイツの人文主義者『エラスムスの勝利と悲劇』と『カステリョ対カルヴァン』という二つの歴史評伝を書いています。

前者では、ルターとの協調から対立へと立場を変えながら追い詰められていくエラスムスの姿を考察し、そこに作者自身の姿が投影されている点をとらえました。

後者においても、カルヴァンの思想的専制支配に抵抗するカステリョの生涯を辿り、そこに作者自身の共感と時代背景を読み取りました。

『大学新入生に薦める101冊の本』新版（岩波）では、司馬遼太郎や藤沢周平の著書を解説し、ドイツと日本の歴史文学の相違に関して考察しました。

「ドイツ表現主義とビューヒナー」という論文では、19世紀前半期に活動したビューヒナーの作品が、20世紀前半に活動した表現主義の劇作家トラーとカイザーの作品へ与えた影響関係を考察しました。

さらに図書新聞紙上で定期的に書評を掲載し、関連する研究書を取り上げて論評しました。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2件）

① 島谷 謙、「ドイツ表現主義とビューヒナー」、子午線 ゲオルク・ビューヒナー論集 査読あり、2010年、第8号P.25～30

② 島谷 謙、「原民喜と西欧文学」、『世界肯定の論理と技法』（代表古東哲明）査読なし、2008年、巻無し、P.78～92

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計 2件）

① 島谷 謙、岩波書店、『大学新入生に薦める101冊の本』新版（本人執筆「マサリクの講義録」、「この国のかたち」、「蟬しぐれ」、「夏の花」、「1984」、P.26, 27, 42, 43, 88, 89, 141, 142, 178, 179）2009年、全278頁（共著）

- ② 島谷 謙、世界思想社、
『歴史と想像力』、2008年、270頁（単著）

〔その他〕（計11件）

- ① 島谷 謙、吉田寛『ヴァーグナーのドイツ』
他書評、図書新聞、
査読あり、2010年7月24日号(2975号)、
P. 6
- ② 島谷 謙、西村雅樹『世紀末ウィーン文化
探求』他書評、査読あり、
図書新聞、2009年12月26日号(2947号)、
P. 5
- ③ 島谷 謙、文芸ひろしま小説・シナリオ部
門総評、広島文化財団 『文芸
ひろしま』、査読なし、2009年11月、26
号、P. 144
- ④ 島谷 謙、清水考純『ルネサンスの文学』
他書評、図書新聞、
査読あり、2009年7月25日号(2927号)、
P. 6
- ⑤ 島谷 謙、シュラッファー『ドイツ文学
の短い歴史』他書評、図書新聞、
2008年12月27日号（2899号） P. 3
- ⑥ 島谷 謙、松下たえ子『評伝エルゼ・ラ
スカー - シューラー』他書評、図書新聞、
査読あり、2008年8月2日号(2880号)、
P. 4
- ⑦ 島谷 謙、「ドイツ人作家と日本一トラ
ーとカイザー」、郁文堂、Brunnen、査読あ
り、2008年Nr. 450, P. 1～3
- ⑧ 島谷 謙、和田博文『言語都市ベルリン』
他書評、図書新聞、査読あり、

2007年12月22日号（2851号）、P. 5

- ⑨ 島谷 謙、文芸ひろしま小説・シナリオ部
門総評、広島文化財団、
『文芸ひろしま』、査読あり、25号、2007
年、P. 136
- ⑩ 島谷 謙、小川洋子『物語の役割』他書
評、図書新聞、査読あり、2007年7月28
日号（2831号） P. 7
- ⑪ 島谷 謙、「総合科学部で専門性を追求す
る意義」、広島大学総合科学部「飛翔」、
査読なし、2007年、71号 P. 28, 33

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島谷 謙 (SHIMATANI KEN)
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：00243519

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：